

## 5. 高等教育における母性看護学実習の学習支援 —職場、専門学校への出前式実習の実践的評価—

広島県立保健福祉大学 後 藤 幸 子

### はじめに

看護の大学教育は1950年代に始まり、1991年に11校であった時代から加速し、2000年4月には84校となり今後も増加が見込まれている。つまり、日本の看護大学はここ10年の間に開設された大学が多く、卒業生を出してまだ浅い。「看護の大学教育は、専門職業教育としての特性をもつ。看護学の学問を追究し、かつ学問的に裏打ちされた看護実践を行うことのできる人材を育成する」ことを掲げたばかりである<sup>1)</sup>。看護大学卒業生の臨床能力、看護に対する社会のニーズ、卒業生の就業状況と管理者の期待など、看護大学の人材育成の評価は当にこれからである。即ち、どのような臨床能力をもつ学生を育てるのか。看護学士課程卒業生の到達目標は、看護専門職としての知識・技術を修得し、自立性・責任性、科学的思考力、指導性、倫理性、柔軟性、国際性の6領域の能力形成にある<sup>2)</sup>。

その能力形成の学習の場とする臨地実習は、今後も学習過程の一つとして教育課程に位置づけられるべきであろう。一般に臨地実習は128単位中28単位、総時間数の約3割程度を占め、行われているところが多い。臨地実習は、どのように看護の概念が拡大しても健康への援助を学習させるためには、基本となる患者や家族、さらには地域を相手にするという意味において、学習の重要な機会である。

そこで、医療施設における周産期看護の臨地実習に加えて、ここでは母性看護学実習の位置づけで、「女性の性と生殖の健康問題について保健活動ができる基盤を養う」ことを目的に、地域社会の理解と協力を得て、病院外実習の場を開拓し、それをフィールド実習と位置づけ、企業や学校に出向し彼らを対象に看護学生が行う「出前式実習：Deliver Style Practice：DSPと略す」を展開した。この実践的教授・学習法とその効果を検討した。

### 1.1. 母性看護学の概念枠とその背景

医学の進歩や母子をめぐる生活環境の著しい変化によって女性を取り巻く諸事情も複雑多様化してきていることから、母性看護の概念が拡大してきた近年の社会の動向を踏まえ、私の教育・研究領域である「母性看護学」では、より良い教授・学習法を模索し、取り組んでいる。即ち、これから学ぶ「母性看護学」は、「産科学」的な枠組みでの妊娠・分娩・産褥期のいわゆる従来の周産期における看護を学ぶだけでなく、女性・母性の特性を生理学的、病理学的に理解し、また心理的、社会的、家族的背景についても認識する。加えて、「女性の生涯を通じた性と生殖の健康（セクシュアリティとリプロダクティブ・ヘルスケア）」を基軸に「女性保健学」の視点で捉えた授業設計である。また、生殖医療にまつわる生命倫理

についても学習し、それらの理論に基づき構築し、専門職として保健・看護活動が実践できることを柱としている。

ここでは、その中でも、高等教育における母性看護学実習の学習支援、セクシュアリティとリプロダクティブ・ヘルスケアについて、職場、専門学校への出前式実習の実践的評価を中心に報告する。

さて、母性看護学教育に「セクシュアリティおよびリプロダクティブ・ヘルス」の概念を位置づけている理由には、

- (1)「女性の性と生殖の健康」の理解は母性看護学の基本的理念である。
- (2)女性保健学を視座に入れた看護教育の転換が必要である。
- (3)学部生および大学院生の高等教育ならびに研究的視点の拡大と発展が必要である。
- (4)21世紀に向けた保健・医療・福祉について展望できる専門職業人の人材育成が必要である。
- (5)人々の性および生殖に対するHRQOL指向 (Health-Related Quality of Life) が高まってきている。
- (6)時代や文化の趨勢を鑑み、地球規模でその要請に応えられる看護教育が必要である。

母性看護学の教科目は、母性看護学概論、母性看護方法、母性生活援助論、母性看護と生命倫理、女性医学で構築し、各教科は1単位とし、母性看護学実習3単位で構築している。ここでは女性医学を除いた教科目について、シラバスに標記している一般目標の概要を示す。

まず「母性看護学概論」では「母性・父性の特性を学び母性としての機能が健全に発揮できるように、女性の一生を通して、性と生殖保健に働きかける保健・看護活動であることの包括的な概念が理解できる。期待される学習効果は、女性の健康について生殖保健を視座に、これからの女性保健、母性看護の果たす役割が認識できる。」ことを一般目標としている。「母性看護方法」では、「妊娠・分娩・産褥期、新生児の看護と保健支援、母性看護における家族機能、問題解決法の基礎理論が理解できる。期待される学習効果は、母性看護の支援方法、問題解決方略、看護技術スキル能力が培われる」ことを一般目標としている。次に「母性生活援助論」では、「母性保健の概念、母性保健活動の特性、健康教育の概念とヘルスプロモーションの相互性、女性のライフステージにおける性と生殖の健康、女性保健についての基礎理論が理解できる。期待される学習効果は、女性のエイジングとリプロダクティブ・ヘルスケアにおける問題解決方略と支援スキル能力が培われる。」ことを一般目標としている。「母性看護と生命倫理」では「生殖医療と生命倫理の根幹をなす性の権利、生殖の権利について今日的視点から概観し、性と生殖にまつわる医療と女性の生殖保健の2つの側面から生命倫理について理解できる。期待される学習効果は、IPPF憲章のSexual and Reproductive Rightsを理解し生殖に関わるこれからの医療の在り方と生命倫理観が培われる。胎児診断など出生をめぐる人為的関与を受ける患者・家族の心理、障害児を持つ家族の子育て環境を含め母性看護のあり方が認識できる。」ことを一般目標としている。

## 1.2. 母性看護学実習の概念枠とその背景

「女性の性と生殖の健康問題について保健活動ができる基盤を養う」ことを実習目的に

プロダクティブ・ヘルスサービスの新たな挑戦として、その概念を実習に位置づけ、出前式実習（DSP）を導入した背景について述べる（医療施設における周産期看護の臨地実習は割愛）。

### （その１）「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」の概念の経緯

1990年WHOの生殖研究特別班のディレクターであるFathallaによって提唱。

1994年9月カイロで開かれた国際人口開発会議で、人口問題や家族計画の議論とともに、女性の産む権利や地位向上など「女性の性と生殖に関する健康と権利の向上」という視点も重視され、このリプロ・ヘルス/ライツがキーワードになり、世界的に使われるようになった。厚生省は、これを「女性の性と生殖に関する健康」と訳し、今日では母子保健行政の中でも片仮名で使われてきている。

1995年「セクシュアルおよびリプロダクティブ・ヘルスに関する憲章」が世界女性会議（北京会議）や世界人権会議で合意。1995年IPPF憲章発表<sup>3)</sup>（国際家族計画連盟）

この憲章は「女性の性と生殖の権利」として具体的に12の権利を挙げ、種々のサービスと人権との関連を提言。

1996年12月総理府は男女共同参画推進本部を設置し「男女共同参画2000年プラン」としてリプロ・ヘルス/ライツの観点から「生涯を通じた女性の健康支援」を盛り込み、女性の健康教育・相談指導などの充実を掲げた。

1999年自治体レベルで、「生涯を通じた女性の健康支援事業」として予算化した。

### （その２）情報と教育を受ける権利（IPPF憲章6章）についてDSPで発展させる背景

- (1)すべての人は、性とリプロ・ヘルス/ライツおよびその責任に関して教育や正しい情報を得る権利を有する。
- (2)すべての人は、自分の性生活や生殖に関わる生活に関していかなる決断を下すにも、完全に自由意志によるインフォームド・コンセントの下に、それがなされることを確実にするために、十分な教育と情報を得る権利を有する。
- (3)すべての人は、妊娠・出産調節や無計画な妊娠を予防するためのあらゆる方法について、その利点、危険、効果に関する十分な情報を得る権利を有する。

つまり、この世界的趨勢と日本における社会的対応が求められている中で、女性の健康支援へ寄与する人材となる看護婦・保健婦・助産婦の資格を得る専門職業人育成に向けて、リプロ・ヘルス/ライツに関する理念とそのスキル等の習得は必須条件と考えている。

このような社会の動向を鑑み、「女性の健康、性と生殖保健、加齢、女性保健、母子保健・母性看護・家族・生命倫理・健康教育」をキーワードに理論構築し、学士課程教育における母性看護学を再構築した教授・学習を既習し、フィールド実習として展開した。

## 2. フィールド実習（DSP方式）の実践法

### 2.1. 目的・目標

目的：女性のライフステージにおける健康問題について、性（Sexuality）および生殖

(Reproductive Health) について保健活動ができる基盤を養う。

目標：女性の健康問題について、性 (Sexuality) および生殖 (Reproductive Health) について、集団を対象に、保健活動を実践し評価ができる。

具体的目標：1. 女性のライフステージに適した保健指導計画案が作成できる

2. 指導案に適した教材・教具が作成できる

3. 実践に向けて役割の調整など運営方法が立案できる

4. チームと共に実践活動ができる

5. 実施後、評価・考察ができる

6. 対外的な事後処理ができる

## 2.2. 出前式実習 (DSP) の定義

「指導対象とする受講生の所在地に出向し、その施設において、集団を対象に健康教育を実施する」ことを出前式実習と定義した。

## 2.3. 看護学生の背景

(1) 学年：3年生67人 (女性65人、男性2人) 年齢20歳－32歳、平均年齢21.4歳

(2) 授業進度：母性看護学概論2年次、母性看護方法2年次、母性生活援助論3年次に全員単位取得、母性看護と生命倫理3年次 (選択) 履修後に実習開始

(3) 実習期間：平成10年10月19日－平成11年1月29日 (病院・フィールド実習含む)

(4) 実習班：67人を8班に編成 (1つの班が8－9人) \* 1－4期の編成

(5) 展開：1組の班が主催、他の1組の班が協力班と位置づけて展開 (例えばVTR係、照明係など)

(6) フィールド実習期間：準備3日間、DSP指導所要時間90分、実習後総括1日間

## 2.4. 事前の企画について

受講前に対象とする施設で「女性の性と健康に関する事前アンケート調査」実施

DSP企画が実際に実施できるか否か、承諾を得るべき事前伺いと受講生となる対象の意向調査を目的に実施した。実施時期：平成10年9月10日－9月19日

(1) A 理美容専門学校生 1年生 71人回収、回収率97.3% (18歳－22歳：平均年齢18.6歳) (女性47人、男性24人)

(2) スーパー店女性職員：47人回収、回収率23.5% (19歳－53歳：平均年齢39.3歳)

(※いづれもアンケートに同意を得た者を対象とした)

## 2.5. テーマの決定・企画・実施の一連の進め方等について

(1) 事前の受講生ニーズ調査結果をもとに、実習グループ間で討議してテーマを決定

(2) 企画準備：保健指導案作成－教材教具作成－運営方法決定－実践リハーサルVTR収録

(3) 実施方法：

① 対象学年・実習方法：3年生65人 (女子63人・男子2人)、8班編成

② 実習期間：平成10年10月19日～平成11年1月29日

③実習出向先・受講者数：

A理容美容専門学校・各班20人×4班、B大手スーパーマーケット・各班20人×4班

④調査方法・調査期間：アンケート調査法・平成11年1月29日～2月5日実施

(イ) 第1回調査；各班DSP各期終了毎にアンケート調査

(計67人配布、回収66人、回収率98.5%) 無記名式で13項目を5段階評価

実施時期：1期(1・2班) H10年11月6日：17人

2期(3・4班) 11月25日：17人

3期(5・6班) 12月17日：17人

4期(7・8班) H11年1月26日：16人

(ロ) 第2回調査；教授・学習評価のフォローアップアンケート調査

実施時期：平成11年1月29日～2月5日

(計67人配布、回収65人、回収率97.0%) 無記名式で130項目を5段階評価

⑤評価方法：評価項目13項目、130項目を設定、評価尺度は「5.非常に思う」～「1.全く思わない」の5段階評価とし無記名式で行った。なお、学生には調査目的を書面で説明し同意を得た。

⑥統計処理：SPSSおよびExcelで解析

⑦看護学生の指導条件：各人が受講生集団の前で口頭で話すことを必須条件とした。テーマは各班が討論し決定、90分間の指導計画を立案し展開した。

実演状況VTR収録、終了直後に受講生へアンケート調査・回収

(VTR/アンケートは受講生のインフォームド・コンセントICを得て実施、受講生へのアンケート票はグループで作成させた)

⑧各班のDSPテーマ(表1)

出向先施設	班	テーマ	受講生
理美容専門学校	1班	妊婦体験を通じていたわりの気持ちを育てよう	19人
	2班	避妊とうまくつきあうー子供には産まれてくるべき時期があるー	20人
	3班	Do you know your partner?ー心と体の変化を知り、避妊を考えようー	15人
	4班	あなたのSex大丈夫?ー自分の体は自分で守ろうー	19人
大手スーパーマーケット	5班	これで安心婦人科入門ー病気のサインを見逃さないで・賢い婦人科の受け方ー	18人
	6班	知って得する更年期ー豊かな熟年への旅立ちのためにー	20人
	7班	更年期は幸年期ー更年期とうまくつきあい、のりこえるためにー	18人
	8班	気づいてほしいあなたのからだー女性特有の病気の早期発見ー	17人

(4)評価：実践活動の評価、受講生へのアンケート実施した集計・分析、考察させた。

これは受講生が看護学生たちを評価、即ち学生が行った指導に対する評価となる。

(5)実習後全体総括

### 3. DSP実践を通しての教育的評価

#### 3.1. DSP各期終了毎のアンケート調査結果

DSP実習直後の看護学生の評価を13項目について調査した。まず「あなたにとってこの企画はどうしたか」の問いでは、「非常によい」と答えたものは67人中35人で、2人のうち1人の割合で高く、この企画が「よい」と答えたものとでみると、10人のうち8人がDSP企画について高い評価をしていることが推察される。「DSPは有意義でしたか」という問いでも同様に85%の高い割合でフィールド実習は有意義であったと感じていることがわかった。また「この企画が学生により知的刺激を与えていましたか」という問いでは、「非常によい」では54%、「よい」と答えたもの34%を合わせると、ほぼ10人中9人で殆どのものが知的刺激を感じながら創造的に取り組んだDSPであったと推察される。「あなたは楽しく取り組みましたか」では、「非常に楽しんで取り組めた」と答えたものが36%、「楽しめた」では50%で約9割のものが楽しく有意義に受け止めていることが推察される。このような高い傾向には、グループで健康教育ができたという達成感や充実感などが、その要因になっているものと推察される。またDSP実施後の一両日に調査したことも要因の1つになっていると思われる。一方、「学生の主体性を尊重されたと思いますか」の問いでは、5人に1人は「そう思わない」と答えており、2名の教員が中心的指導をしていたことも、指導の一貫性や、学生の資質などを受け止めての配慮や、関わり方にも、学習者の心理に影響しているものと考えられる。個性を持っている学生に対しての学習支援という点から、支援的立場である教員の指導能力やグループダイナミックスを発展させていくためのスキルの向上は、学習効果や達成感に大きく関わることから、教授・学習法についての教員の課題である。

さて、調査項目の中で、「フィールド実習は有意義でしたか」という項目と「この企画は良かったか」、という項目では( $r=0.805$ )と強い相関が見られた(Pearsonの相関係数両側有意確率)。また「実施に向けて学生の主体性を尊重されたと思いますか」という項目と「学生自身に考えさせる工夫がされていきましたか」という項目で( $r=0.792$ )の強い相関を示した。「教員はグループワークに際して適切な助言をしていたと思いますか」という項目とやや強い相関が見られたのは「学生の主体性を尊重されたと思いますか」の項目( $r=0.781$ )であった。

次に、自由記載では「このフィールド実習の一番よかった点は何ですか」という問いでは、[A理容美容専門学校]で看護学生が体験したものでは、

- ・対象者の年齢が近くまた、専門分野は違うにしても同じように技術を習得しようと頑張っている学生同士がお互いにふれあい、とても良い刺激を与え合ったように思う。
- ・みんなで健康教育をしたという達成感があること。
- ・18～19歳ということで彼らの知りたいことは何なのか、どうすれば講義に引き込んでいられるか、私たちがしたいことでなく受講生を主体に講義の構成を考えていけたこと。
- ・私たちが行った保健指導に対して受講生が喜んでくれたこと。
- ・伝えたいことを相手に理解してもらうことがどんなに大変であるかがわかった。

[大手スーパー店]で更年期女性を対象に実施したものでは、

- ・自分とは違う年代のかたの様々な意見や言葉を聞くことができたこと、またその年代の性について実際に聞くことができたこと。
- ・健康教育をする側はどのように行ったら良いかという視点ができたこと。
- ・グループメンバーと団結して健康教育が行え、達成感が得られたこと。
- ・集団指導する際のアセスメントやテーマの決定から準備・実施・評価までの流れがわかったこと。
- ・健康で働いている人々に対して、より健康を守っていくという視点がもてた。

次に「どういう点を変えてほしいですか」という自由記載で見ると、

[A 理容美容専門学校] で体験したものでは、

- ・準備の期間をもっと長くしてほしい。フィールド実習の準備、病院実習、フィールドへ出向の順ですべてが中途半端な感じがした。頭の切り替えが大変だった。
- ・学生にもっと主体性をもたせてほしい。学生がやりたい、また企画したもの等の方向性を大切にしてほしい。
- ・教員によって助言が違っていたことがあるので統一して欲しいと思った。

[大手スーパー店]で体験したものでは、

- ・準備時間として実習時間内にできるようにしてほしい。
- ・セクシュアリティについてはとても重要なことだとは思いますがそれに傾きがちだったように思う。
- ・対象者の年齢を選べたらいろいろなテーマについて考えられたと思う。

次に「感じたことや意見を自由に書いてください」では、

- ・受講生のアンケートに“楽しかった”“また話しが聞きたい”等といった返答があったのでとてもよかったと思った。予想していた以上に受講生が積極的に参加してくれ反応もよかったので成功したと思う。
- ・今回のフィールド実習は病棟実習にはない達成感を得られることができた。アンケートや感想等の結果から私たちの伝えなかったことそのものが“良くわかりました”と表記されているのを見たときの嬉しさは今までにはないものがあつた。今回のフィールド実習で健康教育というものに強く興味を持つようになった。
- ・発表が90分と聞いたときはいろんなことが言えると思ったが準備を進めるうちにどんどん時間が足りなくなって浅く広くよりも何か一つのことに對して深く指導することが大切だと感じた。
- ・フィールド実習は人に健康教育を行う分自分たちの知識も間違いのないものにしておかないといけないので改めて勉強し直す機会になった。また、対象者の特性を考えてどうすれば指導効果があげられるか、みんなでアイディアを出しながら指導案を作成していたことは今後の健康教育の際にとっても役立つことだと思った。
- ・対象者の方はほとんどは自分の母親に近い年代であり理解度や知りたいと思っていることが何なのかつかみにくくテーマを考えていく上で難しかった。看護学生として対象者

に健康管理や自分の体に関心を持ってもらうように話の内容や形式など工夫して進めていく必要性を感じた。

- ・ 今回の健康教育を振りかえることで問題の意識化が非常に重要であることを再認識した。問題の意識化をするにはどのような方法で健康教育を進めていけばよいか、そのためには健康教育を行っていく側には何が求められているか、今後考えていきたいと思った。
- ・ 教科書や講義で勉強するだけでは気づけなかったことも、実際に体験することでわかったと思う。“笑顔”の大切さも緊張のあまり忘れていたがそのような初歩的と思えることが意外に難しく、でも大切なことなのだと実感した。

### 3.2. DSP実施後の教授・学習評価のフォローアップアンケート調査結果

この調査時期は、他のすべての科目領域の各論実習終了後に、130の調査項目について5段階評価で実施した。調査時期は母性のフィールド実習後、最短2日～最長2ヶ月後に調査したものである。130項目のうち、1～123までの項目について5段階評価をした結果、相関係数特に $r=0.8$ 以上の強い相関があった項目について（表2）に示す。また1～130の設問項目についての結果は（表3）に示す。評価内容および評価要素は、メディア教育開発センターの伊藤教授の「授業評価調査アンケートサンプル1－5」の基本コードを参考に作成した。評価要素は「理解」、「適切」、「関心」、「態度」、「総合」とサンプル毎には区分せず、ここでは、学生の学習ステップに沿い区分し小設問を作成しコード化した。即ち、(1)学内オリエンテーションについて1～6番の小設問で6つの設問、(2)進行過程の教員の助言については7～47番の41の小設問、(3)教材・教具づくり、書籍、私製パンフレット・OHP、既製のVTR使用、グループで作成した指導案などについては、48～60番の12の小設問、(4)発表に向けての助言については61から74番までの13の小設問、(5)グループワークに関しては75～89番までの14の小設問、(6)現地での体験発表等の関連については、90～130までとし、自由記載を含めこの節では40の小設問を作成した。

さて、結果の概要についてみると、まず、看護学生の年齢構成は、20～23歳が70.8%を占めていた。DSPの事前オリエンテーションについて「DSPの目的・目標が明示されていたと思うか」という問では、「非常にそう思う」と答えたものは、21.5%、「そう思う」が43.1%、「どちらともいえない」が29.2%であった。オリエンテーション資料を各人に配布し説明を加えたが、約3人に1人の割合でDSPの目的や進め方を不確実に受け止めていることが推察される。

次にOHP/VTR、パンフレット、指導案等の教材作成に向けて教員の助言がどうであったかをみた。まず「教員側からテーマに関連する教材や教具のヒントが提示できていたと思うか」という問では、「非常にそう思う」「そう思う」が約8割以上を占めた。「学生に考える工夫がされていたと思うか」という問では、「非常にそう思う」と答えたものは16.9%、「そう思う」が56.9%と7割以上を占めた。「作成した教材に対して十分な助言が返ってきたか」という問では、「非常にそう思う」が24.6%、「そう思う」が47.7%と7割以上を占めた。これは指導の方法論が明確化され、具体的な教具開発へと発展させるところまで展開できたこ



とが、高い評価を示したものと推察される。

次に、デモンストレーション発表を実施した時の教員の助言がどうであったかをみた。まず「学生に考える工夫がされていたと思うか」という問では、「非常にそう思う」と答えたものは16.9%、「そう思う」が53.8%と7割以上を占めた。「発表態度・発表要領についての助言は役立ったか」では「非常にそう思う」と答えたものは24.6%、「そう思う」が46.2%を占め、助言は役立ったと答えているものが7割以上を占めた。学生にはデモストが本番に向かう最も臨場感のある重要な場となることから、言葉遣いや間の取り方、目線、ユーモア、表情、教材提示方法や説明の仕方など細部にわたる教員の助言は真剣に受け止めていることが伺われる。

次にグループワークに関してみると、まず「仲間同士で良い知的刺激を受けたか」では、「非常にそう思う」58.5%、「そう思う」40.0%を占めた。また「グループワークを通して“やった”という達成感があるか」では、「非常にそう思う」61.5%、「そう思う」33.8%を占めた。このことから殆どのものがグループダイナミクスのプラス効果及びグループの一体感を実感していることがわかった。

次に、出向先での本番の指導体験後の評価をみた。まず「グループで設定したテーマに沿った概念と具体的な展開方法がわかったか」という問では、「非常にそう思う」「そう思う」が9割を占めた。指導体験後の評価項目についての相関係数( $r=0.8$ )以上の強い値を示した項目を示す(表2)。

「テーマに沿った概念と具体的な展開方法がわかった」という項目と強い相関を示したのが「活用した教材・教具は有益であった」( $r=0.85$ )、および「教材・教具の有用性がわかった」( $r=0.86$ )であった。また「DSP企画から良い知的刺激を受けた」という項目と強い相関を示したのが「健康教育するための専門的知識・技術・態度が学べる実習内容だった」( $r=0.85$ )、「企画・運営・評価の一連の流れがわかった」( $r=0.86$ )であった。

一方、「健康教育の展開方法が身に付いた」という項目と強い相関を示したのが、「指導技術を学ぶことが出来た」( $r=0.80$ )、「企画・運営・評価の一連の流れがわかった」( $r=0.83$ )を示した。小設問コード125、このDSP体験の「総合的な満足度」では、100%と答えたものが8人、90-99%満足と答えているものは20人、80-89% (23人)、70-79% (9人) 60-69% (1人) と、「70%以上の満足度あり」と答えたものは65人中64人で、高い満足感を得ているものが殆どであった。

因みに、小設問コード126も「座学に関する自己の満足度」も調査したが、70%以上「満足」と答えたものは65人のうち59人、「80%以上の満足度あり」と答えたものは38人で全体の6割を占める。講義が、フィールド実習においてさらに理論と実践でのつながりを学び、科学的根拠に基づく実践活動へと発展し、かなり有機的に座学においても教授・学習が展開できていたのではと推察される。この論拠には、小設問コード106「専門的知識・技術・態度が学べた」、コード119「さまざまな指導スキルを学ぶことができた」、コード120・121「指導案9-1、9-2の様式に沿って作成したことは意義があった」、コード122「健康教育に対して展開方法が身についた」、コード123「企画・運営・評価の一連の学習過程が分かった」、これらの設問に対して、7-8割以上のものが「非常に思う、そう思う」と答えていること

からも推察される。また、コード115, 116, 117, 「この企画は知識面で要求が高かった、技術面で要求が高かった、発表態度面で要求が高かった」の設問においても、7割以上のものが「非常に思う、そう思う」と答えている。コード118「全体的に見て自分にとって価値があったか」では、約9割のものが「非常に思う、そう思う」と答えている。

表2. DSP実施後の評価—相関について—

評価項目	利用された教材・教具は有益であった	利用された教材・教具は適切であった	教材・教具等の有用性がわかった
設定したテーマに沿った概念と具体的な展開方法が分かった	$r=0.85$	$r=0.80$	$r=0.86$

評価項目	この企画から良い知的刺激を受けた	フィールド実習の目的目標は達成できた	役立つ知識・技術・態度が学べた	自分にとって価値があった	企画・運営・評価の一連の流れがわかった
教材・教具等の有用性がわかった	$r=0.82$	$r=0.87$	$r=0.87$	$r=0.81$	$r=0.84$

評価項目	専門的知識・技術・態度が学べる実習内容だった	様々な指導の技術(スキル)を学ぶことができた	企画・運営・評価の一連の流れがわかった
DSPの企画から良い知的刺激を受けた	$r=0.86$	$r=0.81$	$r=0.87$

評価項目	専門的知識・技術・態度が学べる実習内容だった	自分にとって価値があった	企画・運営・評価の一連の流れがわかった
役立つ知識・技術・態度が学べた	$r=0.85$	$r=0.86$	$r=0.86$

評価項目	自分にとって価値があった	様々な指導の技術(スキル)を学ぶことができた	企画・運営・評価の一連の流れがわかった
専門的知識・技術・態度が学べる実習内容だった	$r=0.81$	$r=0.84$	$r=0.83$

評価項目	様々な指導の技術(スキル)を学ぶことができた	企画・運営・評価の一連の流れがわかった
健康教育に対する展開方法が身についた	$r=0.80$	$r=0.83$

次にコード124の「実践する能力が身についた」では、2人に1人が「非常に身についたと思う、そう思う」と答えている。その自由記載事項について示す。

- ・発表、資料作成、教材作成、指導など。
- ・健康教育の概要が分かった。
- ・集団での対話や話の仕方がよく分かった。
- ・対象者に講義をするという一連のプロセスを実施すること。
- ・グループメンバーで主体的に発表内容を考え必要な指導媒体を分担して作業するところ。
- ・有効なパンフレットの活用、理解しやすい話し方。
- ・病院に入院している患者や地域住民などにも健康教育を実践できるような気がする。
- ・自分の学びを、人へ正確に分かりやすく伝えるということ。
- ・集団を対象にして、いかにして、言いたいことを伝え、理解してもらえるか。
- ・グループワークが有効的。
- ・長すぎる話だけの説明では注意を引きにくい。
- ・初対面の相手に性に関する話を恥ずかしがらずに話す方法。
- ・興味を引くような構成の仕方、話し方。
- ・対象を前に発表するということ。
- ・アンケートにより実施内容を評価すること。
- ・企画の仕方、発表時の工夫点など。
- ・限られた時間の中で伝えたいことを絞り、いかに分かりやすく、参加者の脳裏に残るものに仕上げるかというところ。
- ・媒体の作成の仕方、その際の留意点、全体の流れや説明の内容をアセスメントする能力を磨く機会になった。
- ・人前で話すこと、またグループ内の話し合いでは発言を促すように話すこと。
- ・話し方、雰囲気作り、どんな風に進めるのか。
- ・アセスメントをし、テーマの根拠を考え、テーマを決めること。
- ・テーマに基づいて、内容を練ったり、教材を作ること。

次に、コード127の「自己の満足度を高めるためにはどのような点を改善したいですか」についての自由記載を求めた結果について示す。

- ・興味のある点を見つけ、それについて深めていくことができるようにする。
- ・もう少し自己学習の時間を取った方が良かった。
- ・フィールド実習の準備時間をきっちり用意して、ゆとりを持って取り組めるようにしてもらいたい。
- ・準備期間において、時間内に終わらせる。
- ・グループ内の非協力的なメンバーの積極的参加を望む。
- ・もっと積極的に講義などに臨んでいくこと。
- ・自分がより学習を深めること。
- ・自分ではかなり満足している。

- ・授業、実習前に何をするのか明確にしておきたい。
- ・興味を持つ。
- ・疑問を解決する力をつける。
- ・自己の理解力をつける。
- ・自分が疑問に思ったことは、すぐ調べる。
- ・先のことを考慮した学習、レポートへの取り組み。将来、役立つと言うことを理解した上で臨む。
- ・実習に行って初めて、授業の内容やレポートの意味を理解することが多かった。
- ・文献、資料、教材の活用の仕方を学びたい。
- ・事前学習を深めておく。基礎知識をしっかり持つておく。
- ・より具体的な対象の把握、理解とともに、ライフサイクル、発達段階における知識の学習。
- ・もう少しゆっくりと、きちんと計画を立ててから実行に移す。
- ・相手から返ってきたアンケートに返答をしたい。また、もう一度行って、不足だった内容（対象者からの要望）を伝えたい。
- ・何が必要なのか、よく考えて内容をしぼっていく。
- ・フィールド実習を行うにあたり、準備時間は殆ど無いのに、どんどん内容は広がって、病棟実習も加わって、全員パニックだったから、改善して欲しい。
- ・対象のことをもっと知るべき。
- ・もっと豊かな発想ができるよう、柔軟な考えを持ちたい。
- ・もう少し時間をかけて、細かい部分を手直ししたかった。
- ・人前で発表することに慣れる、コツをつかむ。
- ・自分の欠点を改めていく。
- ・様々な文献を読んでもっと勉強し、専門的知識を増やして、看護婦の立場からの見解を出せるようにする。
- ・参加者の前で発表することが無かったので、参加者とのやり取りをしたりして、生の反応を味わってみたかった。
- ・復習をする。
- ・授業で学習したことに留まらず、そこからより掘り下げて疑問点、興味のあることなどを自己学習でプラスする必要がある。
- ・授業内容に関連した文献を探し、より深く学ぶ姿勢が必要だと思う。
- ・自分の分担したところだけで精一杯で、他のメンバーの発表内容までは殆ど手伝うことができなかったのも、相談された時にはもっと積極的なアドバイスができればよかった。
- ・より具体的に方法論を学んだり、そのための文献やビデオを観たり、実際にそういった場に触れる機会に接する。
- ・各期に起こりやすい健康問題を深く掘り下げ、健康教育に活かす。
- ・よりわかりやすくするには、ということを常に考える。

- ・自分の興味のあるテーマについて、調べたり等の行動を起こすこと。
- ・欲を出して学ぶ。興味を持って臨む。
- ・自分たちを主体で、失敗したくはないが、ある程度思うようにやってみたい。
- ・自分たちが何故この内容の健康教育をしようと思ったのか明確な意志を持って、計画性を持って取り組む。

次にコード128の「自己学習およびグループ学習で費やした時間外の大体の延べ期間」では、最少が10時間未満から最大60時間以上と大きな幅がある。平均約30時間程度の課外学習をしていた。自由記載の項でも学習への心身の負担を課していることも明らかになり、土曜・日曜返上でグループワークをしている状況でもあった。時間外の自主活動については、今後の課題となった。

次にコード129の「今後講義ではどのようなところを補足してほしいですか」では、

- ・技術面について
- ・様々な内容のビデオが見たい。
- ・具体的な例をあげて、その効果を教えて欲しい。
- ・保健指導の方法。
- ・アンケートなどの事前情報がもっと欲しい。
- ・フィールドの準備→病棟実習→フィールド実施、という流れで、フィールドに集中できなかったし、時間が足りなかったのもので、その点を改善して欲しい。
- ・自分たちのグループワークではなく、先生の講義をもっと聞きたい。
- ・一般的な女性が持つ体や性の疑問についての解決策をもっと深く追求していく。
- ・母性領域における看護技術について、授業で取り上げ、技術を提供する根拠を押さえ、実際に教員の指導のもと技術練習して欲しい。
- ・具体的に事例を用いた授業展開をして、アセスメントする能力を身につけ、そこから見えてくる問題点をもとに看護計画を立てることができるように、授業でもっと事例検討を取り上げて欲しい。
- ・自己学習で提出した新生児の看護、妊婦・産婦・褥婦のアセスメント、不妊に関するレポートについて、何かポイントか、どのようなことを押さえて勉強するか、教官からのフィードバックがあれば、自己学習の反省や不足していたところを補足するのに役立つ。
- ・性に対する各年齢の考えについてのアンケート。
- ・内容は十分だと思うので、もう少しゆっくりして欲しい。
- ・健康教育の指導の実際。
- ・保健指導を実際に行っている機関について、ビデオを観たり、講義を受けてみたい。
- ・講義全体が抽象的でだらだらしていたように思う。
- ・男性に対しては、どのように母性に対する指導を行えば良いのか。
- ・事前に受講者にアンケートを取ってくれていたのもので、とてもアセスメントしやすかった。
- ・効果的な健康教育が行えているグループのビデオを観ての学習。

#### 4. 得られた成果について

フィールド実習は初めての実験的性教育企画であった。そこで124評価項目について看護学生の回答を求めた。学生65人の評価をみると、「教育企画」に関しては9割以上のものが意欲的に取り組めたこと、知的刺激をうけ、有意義であったと回答していた。実習の「目標達成度、満足度」も同様に非常に高い評価であった。

一方、受講生では、「この健康教育はあなたのこれからの結婚・妊娠、日常生活に役立てていけそうですか」という問いでは、「非常にそう思う」42%、「そう思う」が47%を占め、受講生全員が性に関する教育を受けたことへの有用性や意義を感じていることが分かった。また、「看護学生の関わりについてどう思うか」では、「非常に良かった」が78%、「良かった」が22%を占め、楽しく、気楽に対話ができたといった感想文からも、仲間教育の有用性が大きいことが窺われた。未婚男女の性の自立支援に、このフィールド実習は看護学生にとっても、また受講生にとっても大いに役立つことが示された。

女性のライフステージにおける性と生殖の健康、女性保健についての基礎理論が理解でき、女性のエイジングとリプロダクティブ・ヘルスケアにおける問題解決方略と支援スキル能力が培われることを一般目標に掲げた。そしてフィールド実習を構築し、女性のライフステージにおける性と生殖について保健活動ができる基盤を養うことを目的として実施したDSPの教授・学習法に対する教育評価をアンケート調査でおこなった。その結果、集団における健康教育のスキル能力が啓発され、学部生の知的刺激を喚起し、体験できない臨場感のある当に実践をとおして感性も高められたように思う。学生間の相互作用や学習の取り組み方、この体験学習の実習記録ノートからも、地域における女性保健活動のこれからのヘルスプロモーションの在り方や、集団指導におけるスキルの1つとして認識できたものとする。

しかしながら、一方、学習支援という側面から振り返ると、その分析は不十分である。この実践活動のそれぞれのプロセスにおいてVTR収録しているが、その分析はこれからである。オリエンテーションからVTR開始し（学生のICの上、また学生自身のフィードバックにも大いに活用した）、学生の反応を撮り、実践場面、受講者への最後の挨拶までの一連をVTR記録した。大学教育における看護の臨地実習の教授と学習の関係を表す学習理論や学習支援について、さらにきめ細かな学習評価、例えば学習過程における最も重要な要素と考えられている、動機付け、報酬と罰、訓練などがどのような学習の原理で発展していくのか、あるいは定着させなければならないのか。実践学から分析し学習様式をモデル化するなど方向性も見えてくるかもしれない。このような学習活動は、1対1の教授学習法、多人数集団方式の教授学習法、小集団方式の教授学習法が、学内演習や実習場では、同一時間内で同時に発生する性質を持ち、常に要求される状況にあるのが取り分け臨地実習が最たるものである。このことから録画からの分析も非常に意義深いものである。このたびのDSP教育計画はその3領域の教授学習法すべてが混在した中での展開であった。時にはダイナミックに発展し、学生・教員ともに嬉々として論議し、視点論点が飛びかう。学生の思考を刺激することの重要性和学習達成感やその快感、時には教師と知的対話を成立させるより、劇場的演技をすることなども、重要な教授・学習法であることも共有できた。これは教師の主観的感情にも留意しての行為でなければならない。

臨地実習の目標は、座学における原理や理論知と実践面での行為能力、即ち、認知領域、情意領域、運動技能的領域<sup>4)</sup>の統合であると考えている。つまり頭と心と手を使って理論を習得するどのような活動技術や学習ストラテジーが伝えられているか。新しい課題領域の解明のために、どのような方法の専門能力が習得されているか、どのような活動の美德や手先の習熟、感覚運動的な能力が習得されているか、方法の観点として示唆に富む<sup>5)</sup>。

学習支援とは、「学習者が教授・学習活動の支援を目的とした環境を意図的に整備すること、しかしながら教授とは知識の伝授ではなく、学習者の知識の構成を手助けする行為として整える」ことと、ここでは押さえておきたい。このたびのフィールド実習で関連した多くの教授・学習スタイルは、このような環境下で学習支援してきたからである。教育活動にコンピュータや教材データベースなどはツールとしては使わず、教材教具としての古典的・中間的メディアをツールとして活用しており、これも広義では学習支援システムといえる。

## おわりに

21世紀の看護学教育は、看護を社会の資産として発展させ、生涯教育に積極的にその門戸を開放することも、人々のニーズに的確に対応し得る看護婦（士）、保健婦（士）、助産婦の育成を目指す重要な課題と考えている。そのためにもDSP戦略は、その能力開発の一助となって、これからのリプロヘルスサービスの新たな貢献として社会に価値づけられる方策の1つである。従って、学習支援のための学習スキルやどのような学習方略をとるかということは、学習とはどのようにして成立するものかといった、その原点と成るのは学習観であろう。そういった意味から、学習者にとってこのDSP企画を実践した意義は大である。なお、学習支援とメディア活用の分析はできず、今後の課題とした。

## 引用文献：

- 1) 21世紀に向けての看護職の教育に関する声明、日本看護系大学協議会発行、p.13、1999年1月
- 2) 21世紀の看護学教育－基準の設定に向けて－、Education Criteria for Nursing Science of 21st Century看護学教育研究委員会報告、平成6年3月、財団法人大学基準協会、p.12
- 3) IPPF CHARTER ON SEXUAL AND REPRODUCTIV RIGHTS, VISION 2000、International Planned Parenthood Federation、1996、P 6
- 4) 教育評価ハンドブック、B.S.ブルームJ.T.ヘステイングス、G.F.マドウス著、梶田叡一、渋谷憲一、藤田恵璽訳、第一法規、1977年3月、p.388
- 5) 実践学としての授業方法学、H・マイヤー著、原田信之、寺尾慎一訳、北大路書房、1998年4月、p.107

表3. DSP実施後の教授・学習評価

【母性看護学実習におけるフィールド実習の教授－学習評価】

実習期間 : 平成10年10月19日～平成11年1月29日  
 アンケート調査期間: 平成11年1月29日～2月5日  
 対象学生 : 3年次生67名(有効回答65名、回収率97%)

番号	小 設 問	5 ・ 非 常 に 思 う	4 ・ 思 う	3 ・ ど ち ら だ も な い	2 ・ 思 わ な い	1 ・ 全 く 思 わ な い	0 ・ 無 回 答
●学内オリエンテーションについて							
1	フィールド実習の目的・目標が明示されていた	14 21.5	28 43.1	19 29.2	4 6.2	0 0	0 0
2	フィールド実習の進め方が明示されていた	8 12.3	29 44.6	19 29.2	8 12.3	1 1.5	0 0
3	教官は説明のために準備をしていた	15 23.1	27 41.5	22 33.8	1 1.5	0 0	0 0
4	フィールド実習を進めるにあたり知識が提供された	11 16.9	27 41.5	23 35.4	3 4.6	1 1.5	0 0
5	説明は分かりやすかった	8 12.3	27 41.5	25 38.5	5 7.7	0 0	0 0
6	聞き取りやすい話し方だった	9 13.8	32 49.2	21 32.3	3 4.6	0 0	0 0
●進行過程での教官の助言について							
7	教官の話す速度は適切だった	6 9.2	31 47.7	21 32.1	6 9.2	0 1.5	1 1.5
8	教官の話し方は明瞭である	6 9.2	31 50.8	18 27.7	6 9.2	1 1.5	1 1.5
9	教官の助言は分かりやすい	3 4.6	33 50.8	18 27.7	9 13.8	1 1.5	1 1.5
10	教官の助言はポイントを押さえている	7 10.8	32 49.2	18 27.7	6 9.2	1 1.5	1 1.5
11	よく聞き取れる話し方だった	7 10.8	37 56.9	18 27.7	2 3.1	0 0	1 1.5
12	教官の身振り、表情などの使い方が効果的だった	5 7.7	27 41.5	30 46.2	2 3.1	0 0	1 1.5
13	教官は助言に際して必要な知識があった	21 32.3	31 47.7	12 18.5	0 0	0 0	1 1.5
14	どこが重要なポイントであるかが分かった	5 7.7	27 41.5	22 33.8	9 13.8	1 1.5	1 1.5
15	助言に具体例が適切に盛り込まれていた	8 12.3	29 44.6	23 35.4	3 4.6	1 1.5	1 1.5
16	助言内容は明快で理解しやすかった	5 7.7	24 36.9	26 40.0	8 12.3	1 1.5	1 1.5
17	健康教育の全体像がつかみやすかった	4 6.2	28 43.1	29 44.6	3 4.6	0 0	1 1.5
18	助言の際には健康教育の目的がフィードバックされていた	10 15.4	26 40.0	25 38.5	3 4.6	0 0	1 1.5
19	学生自身に考える工夫がなされていた	15 23.1	26 40.0	14 21.5	8 12.3	1 1.5	1 1.5
20	学生が独自に考えることを奨励した	11 16.9	25 38.5	16 24.6	10 15.4	2 3.1	1 1.5
21	それぞれの学生の質問や相談に応じてくれた	20 30.8	31 47.7	11 16.9	2 3.1	0 0	1 1.5
22	学生の質問や意見に対応してくれた	15 23.1	32 49.2	16 24.6	16 24.6	0 0	1 1.5
23	学生の理解度に気を配りながら進言していた	6 9.2	23 35.4	30 46.2	5 7.7	0 0	1 1.5
24	学生の方向性を確認しながら進言していた	5 7.7	21 32.3	26 40.0	12 18.5	0 0	1 1.5
25	学生のレベルに合わせた助言内容であった	3 4.6	26 40.0	28 43.1	7 10.8	0 0	1 1.5

番号	小 設 問	5 ・ 非 常 に 思 う	4 ・ 思 う	3 ・ ど ち ら だ も な い	2 ・ 思 わ な い	1 ・ 全 く 思 わ な い	0 ・ 無 回 答
26	教官は助言のために準備をしていた	9 13.8	22 46.2	22 33.8	3 4.6	0 0	1 1.5
27	学生のはうに視線を向けて話していた	43.1 66.9	22 33.8	12 18.5	2 3.1	0 0	1 1.5
28	教官の意見や行動に共感するものがあった	9 13.8	26 40.0	27 41.5	2 3.1	0 0	1 1.5
29	グループワークを充実させようとする努力や工夫があった	15 23.1	33 50.8	14 21.5	2 3.1	0 0	1 1.5
30	学生と良い信頼関係をつくる努力や工夫があった	14 21.5	26 40.0	22 33.8	2 3.1	0 0	1 1.5
31	情熱をもって関わっていた	24 36.9	28 43.1	12 18.5	0 0	0 0	1 1.5
32	分からないところは、いつでも気軽に尋ねられた	18 27.7	28 43.1	15 23.1	3 4.6	0 0	1 1.5
33	助言の熱心さ・ノリに、ムラがなく、いつも統一した関わりだった	12 18.5	23 35.4	20 30.8	7 10.8	2 3.1	1 1.5
34	質問や困ったことがあったとき、いつも気軽に相談できた	15 23.1	31 47.7	15 23.1	2 3.1	1 1.5	1 1.5
35	抽象的な概念を分かりやすく提示する工夫がされていた	2 3.1	24 36.9	34 52.3	3 4.6	1 1.5	1 1.5
36	教官の話し方(助言)は面白かった	6 9.2	18 27.7	38 58.5	0 0	2 3.1	1 1.5
37	ユーモアのある関わりだった	7 10.8	20 30.8	33 50.8	2 3.1	1 1.5	2 3.1
38	教官は教えることを楽しんでるようだった	18 27.7	21 32.3	21 32.3	4 6.2	0 0	1 1.5
39	他の実習でも教官と関わってみたいと思った	7 10.8	27 41.5	26 40.0	4 6.2	0 0	1 1.5
40	健康教育を進めるにあたり、興味を高めるための配慮があった	10 15.4	28 43.1	24 36.9	2 3.1	0 0	1 1.5
41	引用された事例は興味深かった	6 9.2	26 40.0	31 47.7	1 1.5	0 0	1 1.5
42	自分の知識をくつがえすインパクトがあった	8 12.3	23 35.4	29 44.6	3 4.6	1 1.5	1 1.5
43	学生は皆平等に教官の助言を受けることができた	15 23.1	33 50.8	13 20.0	3 4.6	0 0	1 1.5
44	教官は学生が発言しやすいように配慮していた	7 10.8	30 46.2	32 49.2	5 7.7	0 0	1 1.5
45	ディスカッションの最中、方向性が分からなくなるとき、気軽に教官に尋ねることができた	12 18.5	26 40.0	21 32.3	5 7.7	0 0	1 1.5
46	教官の助言は方向性を明確にするものであった	3 4.6	26 40.0	27 41.5	8 12.3	0 0	1 1.5
47	助言の際、利用された教材は有益であった	16.9 26.3	52.3 81.5	29.2 44.6	0 0	0 0	1 1.5
●教材 (VTR、OHP、書籍、指導案等) に対しての助言について							
48	重要な教材(OHP、VTR、書籍等)や参考になる教材の提示ができていた	23 35.4	31 47.7	10 15.4	0 0	0 0	1 1.5



番号	小 設 問	5 ・ 非 常 に 思 う	4 ・ 思 う	3 ・ ど ち ら で も な い	2 ・ 思 わ な い	1 ・ 全 く 思 わ な い	0 ・ 無 回 答
49	生活援助論の講義で利用された教材は有益であった	11 16.9	35 53.8	16 24.6	0 0	1 1.5	2 3.1
50	学生が独自に考えることを奨励した	13 20.0	32 49.2	15 23.1	4 6.2	0 0	1 1.5
51	教材に対して学生に考える工夫がなされていた	11 16.9	37 56.9	15 23.1	1 1.5	0 0	1 1.5
52	生活援助論でまとめたグループワークでのプリント類は有益だった	12 18.5	31 47.7	18 27.7	1 1.5	1 1.5	2 3.1
53	教官からの教材提示は有益だった	13 20.0	35 53.8	15 23.1	1 1.5	0 0	1 1.5
54	作成した教材に対して十分なコメントがかえってきた	16 24.6	31 47.7	14 21.5	2 3.1	1 1.5	1 1.5
55	教官は教材に対して指導することを楽しんでるようだった	14 21.5	34 50.8	23 35.4	3 4.6	0 0	1 1.5
56	教材に関する興味を高めるための配慮があった	6 9.2	30 46.2	26 40.0	1 1.5	1 1.5	1 1.5
57	教材作成あるいは活用に関して、引用された事例は興味深かった	4 6.2	35 53.8	23 35.4	3 4.6	0 0	1 1.5
58	自分の知識をくつがえすインパクトがあった	7 10.8	32 50.8	24 36.9	2 3.1	0 0	2 3.1
59	パンフレット作成に際しての留意点がわかった	11 16.9	26 40.0	24 36.9	3 4.6	0 0	1 1.5
60	より重要な概念とそうでないものの区別ができた	3 4.6	28 43.1	30 46.2	2 3.1	0 0	2 3.1
●発表にむけての助言について							
61	発表にむけての助言は明示されていた	12 18.5	36 55.4	14 21.5	1 1.5	1 1.5	1 1.5
62	発表にむけて、学生に考えさせる工夫がなされていた	11 16.9	35 53.8	13 20.0	5 7.7	0 0	1 1.5
63	学生が独自に考えることを奨励した	8 12.3	31 47.7	19 29.2	5 7.7	1 1.5	1 1.5
64	教官は学生の理解度に気を配っていた	4 6.2	33 50.8	20 30.8	6 9.2	1 1.5	1 1.5
65	学生の質問や相談に応じてくれた	14 21.5	35 53.8	13 20.0	2 3.1	0 0	1 1.5
66	学生の理解を確認しながら進んでいる	7 10.8	29 44.6	25 38.5	3 4.6	0 0	1 1.5
67	教官の話し方が面白かった	5 7.7	19 29.2	27 40.0	5 7.7	0 0	1 1.5
68	ユーモアのある指導だった	6 9.2	18 27.7	36 55.4	4 6.2	0 0	1 1.5
69	教官は指導することを楽しんでるようだった	16 24.6	20 30.8	25 38.5	3 4.6	0 0	1 1.5
70	内容に関する興味を高めるための配慮があった	6 9.2	29 44.6	28 43.1	1 1.5	0 0	1 1.5
71	引用された事例は興味深かった	3 4.6	21 32.3	37 56.9	3 4.6	0 0	1 1.5
72	自分の知識をくつがえすインパクトがあった	5 7.7	23 35.4	33 50.8	3 4.6	0 0	1 1.5
73	より重要な概念とそうでないものの区別ができた	5 7.7	24 36.9	33 50.8	3 4.6	0 0	1 1.5

番号	小 設 問	5 ・ 非 常 に 思 う	4 ・ 思 う	3 ・ ど ち ら で も な い	2 ・ 思 わ な い	1 ・ 全 く 思 わ な い	0 ・ 無 回 答
74	発表態度、発表要領についての助言は役立った(話し言葉、教材、目次、間の置き方、表現方法、目線、ユーモア、表情など)	16 24.6	30 46.2	17 26.2	1 1.5	0 0	1 1.5
●グループワークに関して							
75	よい知的刺激を受けた	38 58.5	26 40.0	1 1.5	0 0	0 0	0 0
76	予習復習するように努めた	14 21.5	27 41.5	22 33.8	2 3.1	0 0	0 0
77	自分の分担した課題は他の人に助けを借りた	15 23.1	36 55.4	11 16.9	2 3.1	0 0	1 1.5
78	協同作業を積極的に行った	33 50.8	28 43.1	2 3.1	2 3.1	0 0	0 0
79	グループでの討論を積極的に行った	25 38.5	33 50.8	6 9.2	1 1.5	0 0	0 0
80	討論は次のステップへ発展させることができた	27 41.5	34 52.3	4 6.2	0 0	0 0	0 0
81	納得しながら討論を進めることができた	25 38.5	33 50.8	7 10.8	0 0	0 0	0 0
82	この実習に参加するのが楽しかった	16 24.6	20 30.8	24 36.9	5 7.7	0 0	0 0
83	話し合いながら進めていくことが楽しかった	12 18.5	22 33.8	28 43.1	2 3.1	1 1.5	0 0
84	グループで問題意識を持ち、考えていった	22 33.8	38 58.5	5 7.7	0 0	0 0	0 0
85	グループで一生懸命課題に取り組んだ	42 64.6	21 32.3	2 3.1	0 0	0 0	0 0
86	グループワークは総合的に満足である	32 49.2	29 44.6	3 4.6	1 1.5	0 0	0 0
87	グループワークを通して「やった」という達成感がある	40 61.5	22 33.8	2 3.1	1 1.5	0 0	0 0
88	進んで参加したくなるグループワークだった	17 26.2	22 33.8	22 33.8	4 6.2	0 0	0 0
89	他の学生の考え方から次の発表ステップにつなげられた	31 47.7	26 40.0	8 12.3	0 0	0 0	0 0
●現地での発表体験の関連について							
90	テーマに沿った概念と具体的な展開方法がわかった	18 27.7	39 60.0	6 9.2	0 0	0 0	2 3.1
91	OHP・VTR/プリントなどの有効な使い方がわかった	18 27.7	39 60.0	6 9.2	0 0	0 0	2 3.1
92	利用された教材・教具は有益であった	18 27.7	38 58.5	7 10.8	0 0	0 0	2 3.1
93	OHP・VTR/プリント等の教材・教具は適切であった	14 21.5	37 56.9	11 16.9	1 1.5	0 0	2 3.1
94	目次立てでの構成は適切であった	17 26.2	35 53.8	11 16.9	0 0	0 0	2 3.1
95	教材・教具の活用の仕方がわかった	15 23.1	44 67.7	4 6.2	0 0	0 0	2 3.1
96	パンフレット作成の長所・短所がわかった	15 23.1	38 58.5	10 15.4	0 0	0 0	2 3.1
97	OHP・VTR/プリント等の有用性がわかった	18 27.7	40 61.5	5 7.7	0 0	0 0	2 3.1
98	指導で使った教材は役立った	17 26.2	43 66.2	3 4.6	0 0	0 0	2 3.1

## 【母性看護学実習におけるフィールド実習の教授－学習評価】

実習期間 : 平成 10 年 10 月 19 日～平成 11 年 1 月 29 日  
 アンケート調査期間: 平成 11 年 1 月 29 日～2月 5 日  
 対象学生 : 3 年次生 67 名 (有効回答 65 名、回収率 97%)

番号	小 設 問	5 ・ 非常に 思う	4 ・ 思う	3 ・ どちら でもない	2 ・ 思わ ない	1 ・ 全く 思わ ない	0 ・ 無 回答
●学内オリエンテーションについて							
1	フィールド実習の目的・目標が明示されていた	14	28	19	4	0	0
		21.5	43.1	29.2	6.2	0	0
2	フィールド実習の進め方が明示されていた	8	29	19	8	1	0
		12.3	44.6	29.2	12.3	1.5	0
3	教官は説明のために準備をしていた	15	27	22	3	0	0
		23.1	41.5	33.8	1.5	0	0
4	フィールド実習を進めるにあたり知識が提供された	11	27	23	3	1	0
		16.9	41.5	35.4	4.6	1.5	0
5	説明は分かりやすかった	8	27	25	5	0	0
		12.3	41.5	38.5	7.7	0	0
6	聞き取りやすい話し方だった	9	32	21	3	0	0
		13.8	49.2	32.3	4.6	0	0
●進行過程での教官の助言について							
7	教官の話す速度は適切だった	6	31	21	6	0	1
		9.2	47.7	32.3	9.2	0	1.5
8	教官の話し方は明瞭である	6	33	18	6	1	1
		9.2	50.8	27.7	9.2	1.5	1.5
9	教官の助言は分かりやすい	3	33	18	9	1	1
		4.6	50.8	27.7	9.2	1.5	1.5
10	教官の助言はポイントを押さえている	7	32	18	6	1	1
		10.8	49.2	27.7	9.2	1.5	1.5
11	よく聞き取れる話し方だった	7	37	18	2	0	1
		10.8	56.9	27.7	3.1	0	1.5
12	教官の身振り、表情などの使い方が効果的だった	5	27	30	2	0	1
		7.7	41.5	46.2	3.1	0	1.5
13	教官は助言に際して必要な知識があった	21	31	12	0	0	1
		32.3	47.7	18.5	0	0	1.5
14	どこが重要なポイントであるかが分かった	5	27	22	9	1	1
		7.7	41.5	33.8	13.8	1.5	1.5
15	助言に具体例が適切に盛り込まれていた	8	29	23	3	1	1
		12.3	44.6	35.4	4.6	1.5	1.5
16	助言内容は明快で理解しやすかった	5	24	26	8	1	1
		7.7	36.9	40.0	12.3	1.5	1.5
17	健康教育の全体像がつかみやすかった	4	28	29	3	0	1
		6.2	43.1	44.6	4.6	0	1.5
18	助言の際には健康教育の目的がフィードバックされていた	10	26	25	3	0	1
		15.4	40.0	38.5	4.6	0	1.5
19	学生自身に考える工夫がなされていた	15	26	14	8	1	1
		23.1	40.0	21.5	12.3	1.5	1.5
20	学生が独自に考えることを奨励した	11	25	16	10	2	1
		16.9	38.5	24.6	15.4	3.1	1.5
21	それぞれの学生の質問や相談に応じてくれた	20	31	11	2	0	1
		30.8	47.7	16.9	3.1	0	1.5
22	学生の質問や意見に対応してくれた	15	32	16	1	0	1
		23.1	49.2	24.6	1.5	0	1.5
23	学生の理解度に気を配りながら進言していた	6	23	30	5	0	1
		9.2	35.4	46.2	7.7	0	1.5
24	学生の方向性を確認しながら進言していた	5	21	26	12	0	1
		7.7	32.3	40.0	18.5	0	1.5
25	学生のレベルに合わせた助言内容であった	3	26	28	7	0	1
		4.6	40.0	43.1	10.8	0	1.5

番号	小 設 問	5 ・ 非常に 思う	4 ・ 思う	3 ・ どちら でもない	2 ・ 思わ ない	1 ・ 全く 思わ ない	0 ・ 無 回答
26	教官は助言のために準備をしていた	9	30	22	3	0	1
		13.8	46.2	33.8	4.6	0	1.5
27	学生のほうに視線を向けて話していた	43.1	33.8	18.5	3.1	0	1.5
28	教官の意見や行動に共感するものがあった	9	26	27	2	0	1
		13.8	40.0	41.5	3.1	0	1.5
29	グループワークを充実させようとする努力や工夫があった	15	33	14	2	0	1
		23.1	50.8	21.5	3.1	0	1.5
30	学生と良い信頼関係をつくる努力や工夫があった	14	26	22	2	0	1
		21.5	40.0	33.8	3.1	0	1.5
31	情熱をもって関わっていた	24	28	12	0	0	1
		36.9	43.1	18.5	0	0	1.5
32	分からないところは、いつでも気軽に尋ねられた	18	28	15	3	0	1
		27.7	43.1	23.1	4.6	0	1.5
33	助言の熱心さ・ノリに、ムラがなく、いつも統一した関わりだった	12	23	20	7	2	1
		18.5	35.4	30.8	10.8	3.1	1.5
34	質問や困ったことがあったとき、いつも気軽に相談できた	15	31	15	2	1	1
		23.1	47.7	23.1	3.1	1.5	1.5
35	抽象的な概念を分かりやすく提示する工夫がされていた	2	24	34	3	1	1
		3.1	36.9	52.3	4.6	1.5	1.5
36	教官の話し方(助言)は面白かった	6	18	38	0	2	1
		9.2	27.7	58.5	0	3.1	1.5
37	ユーモアのある関わりだった	7	20	33	2	1	2
		10.8	30.8	50.8	3.1	1.5	3.1
38	教官は教えることを楽しんでいようだった	18	21	21	4	0	1
		27.7	32.3	32.3	6.2	0	1.5
39	他の実習でも教官と関わってみたいと思った	7	27	26	4	0	1
		10.8	41.5	40.0	6.2	0	1.5
40	健康教育を進めるにあたり、興味を高めるための配慮があった	10	28	24	2	0	1
		15.4	43.1	36.9	3.1	0	1.5
41	引用された事例は興味深かった	6	26	31	1	0	1
		9.2	40.0	47.7	1.5	0	1.5
42	自分の知識をくつがえすインパクトがあった	8	23	29	3	1	1
		12.3	35.4	44.6	4.6	1.5	1.5
43	学生は皆平等に教官の助言を受けることができた	15	33	13	3	0	1
		23.1	50.8	20.0	4.6	0	1.5
44	教官は学生が発言しやすいように配慮していた	7	30	22	5	0	1
		10.8	46.2	33.8	7.7	0	1.5
45	ディスカッションの最中、方向性が分らなくなったり、気軽に教官に尋ねることができた	12	26	21	5	0	1
		18.5	40.0	32.3	7.7	0	1.5
46	教官の助言は方向性を明確にするものであった	3	26	27	8	0	1
		4.6	40.0	41.5	12.3	0	1.5
47	助言の際、利用された教材は有益であった	11	34	19	0	0	1
		16.9	52.3	29.2	0	0	1.5
●教材 (VTR、OHP、書籍、指導案等) に対しての助言について							
48	重要な教材(OHP、VTR、書籍等)や参考になる教材の提示ができていた	23	31	10	0	0	1
		35.4	47.7	15.4	0	0	1.5

番号	小 設 問	5 ・ 非常に思う	4 ・ 思う	3 ・ どちらでもない	2 ・ 思わない	1 ・ 全く思わない	0 ・ 無回答
49	生活援助論の講義で利用された教材は有益であった	11 16.9	35 53.8	16 24.6	0 0	1 3.1	2 3.1
50	学生が独自に考えることを奨励した	13 20.0	32 49.2	15 23.1	4 6.2	0 0	1 1.5
51	教材に対して学生に考える工夫がなされていた	11 16.9	37 56.9	15 23.1	1 1.5	0 0	1 1.5
52	生活援助論でまとめたグループワークでのプリント類は有益だった	12 18.5	31 47.7	18 27.7	1 1.5	1 3.1	2 3.1
53	教官からの教材提示は有益だった	20 30.0	53.8 80.8	23.1 34.1	1.5 2.3	0 0	1.5 2.3
54	作成した教材に対して十分なコメントがかえってきた	16 24.6	31 47.7	14 21.5	2 3.1	1 1.5	1 1.5
55	教官は教材に対して指導することを楽しんでるようだった	14 21.5	24 36.9	23 35.4	3 4.6	0 0	1 1.5
56	教材に関する興味を高めるための配慮があった	6 9.2	30 46.2	26 40.0	1 1.5	1 1.5	1 1.5
57	教材作成あるいは活用に関して、引用された事例は興味深かった	3 4.6	25 38.5	34 52.3	2 3.1	0 0	1 1.5
58	自分の知識をくつがえすインパクトがあった	7 10.8	20 30.8	32 49.2	4 6.2	0 0	2 3.1
59	パンフレット作成に際しての留意点がわかった	11 16.9	26 40.0	24 36.9	3 4.6	0 0	1 1.5
60	より重要な概念とそうでないものの区別ができた	3 4.6	28 43.1	30 46.2	2 3.1	0 0	2 3.1
●発表にむけての助言について							
61	発表にむけての助言は明示されていた	12 18.5	36 55.4	14 21.5	1 1.5	1 1.5	1 1.5
62	発表にむけて、学生に考えさせる工夫がなされていた	11 16.9	35 53.8	13 20.0	5 7.7	0 0	1 1.5
63	学生が独自に考えることを奨励した	8 12.3	31 47.7	19 29.2	5 7.7	1 1.5	1 1.5
64	教官は学生の理解度に気を配っていた	4 6.2	33 50.8	20 30.8	6 9.2	1 1.5	1 1.5
65	学生の質問や相談に応じてくれた	14 21.5	35 53.8	13 20.0	2 3.1	0 0	1 1.5
66	学生の理解を確認しながら進行している	7 10.8	29 44.6	25 38.5	3 4.6	0 0	1 1.5
67	教官の話の方が面白かった	5 7.7	19 29.2	37 56.9	3 4.6	0 0	1 1.5
68	ユーモアのある指導だった	6 9.2	18 27.7	36 55.4	4 6.2	0 0	1 1.5
69	教官は指導することを楽しんでるようだった	16 24.6	20 30.8	25 38.5	3 4.6	0 0	1 1.5
70	内容に関する興味を高めるための配慮があった	6 9.2	29 44.6	28 43.1	1 1.5	0 0	1 1.5
71	引用された事例は興味深かった	3 4.6	21 32.3	37 56.9	3 4.6	0 0	1 1.5
72	自分の知識をくつがえすインパクトがあった	5 7.7	23 35.4	33 50.8	3 4.6	0 0	1 1.5
73	より重要な概念とそうでないものの区別ができた	5 7.7	24 36.9	33 50.8	2 3.1	0 0	1 1.5

番号	小 設 問	5 ・ 非常に思う	4 ・ 思う	3 ・ どちらでもない	2 ・ 思わない	1 ・ 全く思わない	0 ・ 無回答
74	発表態度、発表要領についての助言は役だった(話し言葉、教材、目次、問の置き方、表現方法、目録、ユーモア、表情など)	16 24.6	30 46.2	17 26.2	1 1.5	0 0	1 1.5
●グループワークに関して							
75	よい知的刺激を受けた	38 58.5	26 40.0	1 1.5	0 0	0 0	0 0
76	予習復習するように努めた	14 21.5	27 41.5	22 33.8	2 3.1	0 0	0 0
77	自分の分担した課題は他の人に助けを借りた	15 23.1	36 55.4	11 16.9	2 3.1	0 0	1 1.5
78	協同作業を積極的に行った	33 50.8	28 43.1	2 3.1	0 0	0 0	0 0
79	グループでの討論を積極的に行った	25 38.5	33 50.8	6 9.2	1 1.5	0 0	0 0
80	討論は次のステップへ発展させることができた	27 41.5	34 52.3	4 6.2	0 0	0 0	0 0
81	納得しながら討論を進めることができた	25 38.5	33 50.8	7 10.8	0 0	0 0	0 0
82	この実習に参加するのが楽しかった	16 24.6	20 30.8	24 36.9	5 7.7	0 0	0 0
83	話し合いながら進めていくことが楽しかった	12 18.5	22 33.8	28 43.1	2 3.1	1 1.5	0 0
84	グループで問題意識を持ち、考えていった	22 33.8	38 58.5	5 7.7	0 0	0 0	0 0
85	グループで一生懸命課題に取り組んだ	42 64.6	21 32.3	2 3.1	0 0	0 0	0 0
86	グループワークは総合的に満足である	32 49.2	29 44.6	3 4.6	1 1.5	0 0	0 0
87	グループワークを通して「やった」という達成感がある	40 61.5	22 33.8	2 3.1	1 1.5	0 0	0 0
88	進んで参加したくなるグループワークだった	17 26.2	22 33.8	32 48.8	4 6.2	0 0	0 0
89	他の学生の考え方から次の発表ステップにつなげられた	31 47.7	26 40.0	8 12.3	0 0	0 0	0 0
●現地での発表体験の関連について							
90	テーマに沿った概念と具体的な展開方法がわかった	18 27.7	39 60.0	6 9.2	0 0	0 0	2 3.1
91	OHP, VTR, プリントなどの有効な使い方がわかった	18 27.7	39 60.0	6 9.2	0 0	0 0	2 3.1
92	利用された教材・教員は有益であった	18 27.7	38 58.5	7 10.8	0 0	0 0	2 3.1
93	OHP, VTR, プリント等の教材・教員は適切であった	14 21.5	37 56.9	10 16.9	1 1.5	0 0	2 3.1
94	目次立ての構成は適切であった	17 26.2	35 53.8	11 16.9	0 0	0 0	2 3.1
95	教材・教員の活用の仕方がわかった	15 23.1	44 67.7	4 6.2	0 0	0 0	2 3.1
96	パンフレット作成の長所・短所がわかった	15 23.1	38 58.5	10 15.4	0 0	0 0	2 3.1
97	OHP, VTR, プリント等の有用性がわかった	18 27.7	40 61.5	5 7.7	0 0	0 0	2 3.1
98	指導で使った教材は役立った	17 26.2	43 66.2	3 4.6	0 0	0 0	2 3.1

125. このフィールド実習の企画は総合的に満足度は何%ですか。

回答 (%)	人数 (人)	割合 (%)
60～69	1	1.5
70～79	9	13.8
80～89	23	35.4
90～99	20	30.8
100	8	12.3
無回答	4	6.2
合計	65	100.0

126. リプロヘルスの授業に関する自己の満足度は何%ですか。

回答 (%)	人数 (人)	割合 (%)
30～39	1	1.5
40～49	0	0
50～59	1	1.5
60～69	4	6.2
70～79	17	26.2
80～89	24	36.9
90～99	8	12.3
100	6	9.2
無回答	4	6.2
合計	65	100.0

128. 自己学習およびグループで費やした実習時間外の大体の延べ時間を記入してください。

回答 (時間)	人数 (人)	割合 (%)
10未満	9	13.9
10～19	18	27.7
20～29	7	10.8
30～39	6	9.2
40～49	9	13.8
50～59	1	1.5
60以上	3	4.6
無回答	12	18.5
合計	65	100.0

130. 年齢

回答 (歳)	人数 (人)	割合 (%)
20	2	3.1
21	34	52.3
22	8	12.3
23	2	3.1
32	1	1.5
無回答	18	27.7
合計	65	100.0

番号	小 設 問	5 ・ 非常に 思う	4 ・ 思う	3 ・ どちら でもない	2 ・ 思わ ない	1 ・ 全く 思わ ない	0 ・ 無 回答
99	学生数に対して受講生数は適切だった	19 29.2	35 53.8	9 13.8	0	0	2 3.1
100	人前で発表する事は楽しかった	13 20.0	26 40.0	21 32.3	3 4.6	0	2 3.1
101	この企画からよい知的刺激をうけた	33 50.8	24 36.9	5 7.7	1 1.5	0	2 3.1
102	ガイドブックに記載してあるフィールド実習の目的・目標は達成できた	16 24.6	36 55.4	11 16.9	0	0	2 3.1
103	フィールド実習の構成に工夫があった	14 21.5	27 41.5	20 30.8	2 3.1	0	2 3.1
104	フィールド実習企画全体の時間配分は適切だった	11 16.9	21 32.3	13 20.0	12 18.5	5 7.7	3 4.6
105	自分が集団指導するときに役立つ知識・技術・態度が学べた	25 38.5	31 47.7	6 9.2	0	0	3 4.6
106	専門的知識・技術・態度が学べる実習内容だった	19 29.2	33 50.8	10 15.4	0	0	3 4.6
107	この実習の進み具合は適切だった	7 10.8	21 32.3	21 32.3	13 20.0	1 1.5	2 3.1
108	母性以外でこのような実習形態をする実習をとってみたい	14 21.5	21 32.3	30 46.2	10 15.4	1 1.5	2 3.1
109	この企画は学生の参加が主体であった	15 23.1	30 46.2	14 21.5	3 4.6	1 1.5	2 3.1
110	フィールド実習に集中できた	20 30.8	29 44.6	9 13.8	2 3.1	2 3.1	3 4.6
111	フィールド実習の構成に変化があり退屈させないものだった	12 18.5	24 36.9	23 35.4	4 6.2	0	2 3.1
112	企画内容がユニークだ	16 24.6	18 27.7	26 40.0	3 4.6	0	2 3.1
113	新たな発見があった	23 35.4	26 40.0	11 16.9	2 3.1	0	3 4.6
114	この領域をもっと勉強していきたい	10 15.4	20 30.8	25 38.5	7 10.8	1 1.5	2 3.1
115	この企画は知識面で要求が高かった	22 33.8	26 40.0	15 23.1	0	0	2 3.1
116	この企画は技術面で要求が高かった	17 26.2	25 38.5	20 30.8	1 1.5	0	2 3.1
117	この企画は発表態度面で要求が高かった	16 24.6	23 35.4	22 33.8	1 1.5	0	2 3.1
118	全体的に見て自分にとって価値があった	30 46.2	28 43.1	6 9.2	1 1.5	0	2 3.1
119	このフィールド実習では様々な指導の技術(スキル)を学ぶことができた	21 32.3	33 50.8	6 9.2	3 4.6	0	2 3.1
120	指導案 9-1 様式に沿って作成したことは意義があった	20 30.8	30 46.2	11 16.9	1 1.5	0	3 4.6
121	指導案 9-2 様式に沿って作成したことは意義があった	20 30.8	28 43.1	12 18.5	2 3.1	0	3 4.6
122	健康教育に対して展開方法が身についていた	13 20.0	29 44.6	19 29.2	2 3.1	0	2 3.1
123	企画・運営・評価の一連の学習過程がわかった	21 32.3	31 47.7	11 16.9	0	0	2 3.1
124	実践する能力が身についていた (具体的などんな所ですか?欄外へ)	7 10.8	27 41.5	29 44.6	0	0	2 3.1

番号	小 設 問	5 ・ 非 常 に 思 う	4 ・ 思 う	3 ・ ど ち ら で も な い	2 ・ 思 わ な い	1 ・ 全 く 思 わ な い	0 ・ 無 回 答
99	学生数に対して受講生数は適切だった	19 29.2	35 53.8	9 13.8	0 0	0 0	2 3.1
100	人前で発表する事は楽しかった	13 20.0	26 40.0	21 32.3	3 4.6	0 0	2 3.1
101	この企画からよい知的刺激をうけた	33 50.8	24 36.9	5 7.7	1 1.5	0 0	2 3.1
102	ガイドブックに記載してあるフィールド実習の目的・目標は達成できた	16 24.6	36 55.4	11 16.9	0 0	0 0	2 3.1
103	フィールド実習の構成に工夫があった	14 21.5	27 41.5	20 30.8	2 3.1	0 0	2 3.1
104	フィールド実習企画全体の時間配分は適切だった	11 16.9	21 32.3	13 20.0	12 18.5	5 7.7	3 4.6
105	自分が集団指導するときに役立つ知識・技術・態度が学べた	25 38.5	31 47.7	6 9.2	0 0	0 0	3 4.6
106	専門的知識・技術・態度が学べる実習内容だった	19 29.2	33 50.8	10 15.4	0 0	0 0	3 4.6
107	この実習の進み具合は適切だった	7 10.8	21 32.3	21 32.3	13 20.0	1 1.5	2 3.1
108	母性以外でこのような実習形態をする実習をとってみたい	14 21.5	21 32.3	20 30.8	7 10.8	1 1.5	2 3.1
109	この企画は学生の参加が主体であった	15 23.1	30 46.2	14 21.5	3 4.6	1 1.5	2 3.1
110	フィールド実習に集中できた	20 30.8	29 44.6	9 13.8	2 3.1	2 3.1	3 4.6
111	フィールド実習の構成に変化があり退屈させないものだった	12 18.5	24 36.9	23 35.4	4 6.2	0 0	2 3.1
112	企画内容がユニークだ	16 24.6	18 27.7	26 40.0	3 4.6	0 0	2 3.1
113	新たな発見があった	23 35.4	26 40.0	11 16.9	2 3.1	0 0	3 4.6
114	この領域をもっと勉強していきたい	10 15.4	20 30.8	25 38.5	7 10.8	1 1.5	2 3.1
115	この企画は知識面で要求が高かった	22 33.8	26 40.0	15 23.1	0 0	0 0	2 3.1
116	この企画は技術面で要求が高かった	17 26.2	25 38.5	20 30.8	1 1.5	0 0	2 3.1
117	この企画は発表態度面で要求が高かった	16 24.6	23 35.4	23 35.4	1 1.5	0 0	2 3.1
118	全体的に見て自分にとって価値があった	30 46.2	26 40.0	6 9.2	1 1.5	0 0	2 3.1
119	このフィールド実習では様々な指導の技術(スキル)を学ぶことができた	21 32.3	33 50.8	6 9.2	3 4.6	0 0	2 3.1
120	指導案9-1様式に沿って作成したことは意義があった	20 30.8	30 46.2	11 16.9	1 1.5	0 0	3 4.6
121	指導案9-2様式に沿って作成したことは意義があった	20 30.8	28 43.1	12 18.5	2 3.1	0 0	3 4.6
122	健康教育に対して展開方法が身についた	13 20.0	29 44.6	19 29.2	2 3.1	0 0	2 3.1
123	企画・運営・評価の一連の学習過程がわかった	21 32.3	31 47.7	11 16.9	0 0	0 0	2 3.1
124	実践する能力が身についた(具体的にどんな所ですか?欄外へ)	7 10.8	27 41.5	29 44.6	0 0	0 0	2 3.1